

昭和五十二年、旭川市立郷土博物館長の松井恒幸氏は、「旭川村開村の謎」の中で、永田方正が忠別川のアイヌ語名のチユフ・ペツ (cup-pet) (太陽・川) を意識して「旭川」と命名したという説に、次のように反論を述べた。

①旭川という地名は上川離宮計画と合わせ作られた地名である。②何故なら、チユフ・ペツは上川離宮計画以前の文献に出てこない。③離宮予定地の神楽岡の下を流れる川が、忠君愛国に反する「忠別川」に別れる川ではふさわしくない。④「日出る国」の天皇にふさわしい、旭日日章旗の「旭」が浮かび、⑤それまでのチウ・ペツ (ciw-pet) 水の流

れ早い・川→忠別川)に語感の近いチユフ・ペツ (cup-pet) 太陽・川というアイヌ語名が作られ、「旭川」が生まれた。⑥命名者は、第二代北海道庁長官の永山武四郎であろう。ただし、最後に、これらは決定的な証拠はなく、推論であると断っている。

再び「旭川」の地名起源(中)

松井氏には、「旭川」地名についての考察」という論考もあり、前回紹介したアイヌ語地名研究家の山田秀三も、これを受けて、「チユフ・ペツは永田氏以前の旧記では見たことがない。永田氏ほどの人が自分でアイヌ語を作ったろうか」と記述したのである。

しかし、離宮計画以前の明治二十年に内務省地理局発刊の『改正北海道全図』に、忠別川が「チユツペツ川」と表記されてからは、道庁内の

殖民地撰定などでは、秩別、秩別川、秩別原野、チユツペツ川などとして使用されていたのであった。チユツペツは、チユツペツ (cup-pet) で、実際の発音に近い表記。

永田方正は、これをチユフ・ペツ (cup-pet) と単語に分けて表記したもので、意味は同じである。『改正北海道全図』は、明治十七年に、内務省地理局の高橋不二雄と札幌県測量主任の福土成豊が、石狩川水源の石狩岳に登り、初めて中央内陸部の経緯度実測に成功した画期的な地図。

高橋不二雄は、この踏査の詳細な記録を、『札幌県巡回日誌』として残した。写真はその草稿であるが、忠別川は十一回登場するが、写真④は、最後の四個で、「忠別川→チユツペツ」となっている。高橋の自筆の絵図では、「チユツペツ川」と表記しているが、地図では「チユツペツ川」としている。

- ⑧ チユツペツ川
- ⑨ チユツペツ川
- ⑩ チユツペツ川
- ⑪ チユツペツ川



④『イシカリ川之図』

写真④は、石狩場所請負人として有名な阿部屋村山家に伝わった「イシカリ川之図」で、文化年間に描かれたと言われる地図である。忠別川は「チユツヘツ」と書かれていて、文化期から用例があることがわかる。

さて、アイヌ語が分かり、実際に旭川を踏査した文化期の近藤重蔵や間宮林蔵、安政期の松浦武四郎は、忠別川をチユクベツと表記、チユク・ペツ (chuk-pet) 秋・川→秋に鮭 chuk-cep (盛んに上る川) の意味とされている。

「チユク (chuk) の語尾 (k) は、破裂音ではなく、喉をしめたまままで終わる。つまり、つまったような音である。それでチユフ・ペツだと解されるようになったのかもしれない」と、山田秀三は推論する。

チユク・ペツ (chuk-pet) → チユツペツ (cup-pet) 意識して「旭川」の誕生となった。

※毎月第一週号に掲載します (アイヌ語地名研究会幹事)